

大学における紀要の活用と役割の再考

大阪医科大学看護学部 教授 泊 祐子
(Yuko Tomari)

大学紀要の意義と活用について第3巻の巻頭言で述べる機会があった。そこでは、学会誌と異なり査読期間も短期で論文の公表が迅速にできることや、院生など若手研究者にとれば定期的に論文を“書くこと”による執筆の訓練になることを述べた。

あれから7年が経過し本学も院生を受け入れて6年になる。院生の臨床疑問 (Clinical Question) を研究疑問 (Research Question) へと明確にするプロセスにおいて、院生が大切にしている経験の暗黙知を言語化することが大学院での重要な学びと考え指導している。改めて紀要を見ると院生による文献研究論文が多数掲載されており、院生たちの苦勞が報われていると感じる。

翻ってみると、同じ論文であっても学会誌に掲載されている場合に比べ紀要では低く見られる。その理由の一つには、その学問領域の専門家の査読審査を受けていないこと、二つには同学問領域の研究者の目にとまりにくい点かと思われる (注*)。しかし、看護学の学会誌の場合、掲載には1年から数年かかることもあり、学位論文作成までに掲載できないことが多い。しかし、学位の研究に取り組む前に文献検討を論文にする意義には、論文の形式や文章テクニックを磨くことは当然として、文章にするという可視化のプロセスにおいて、自分の研究の前提となる看護観などものの見方を再確認でき、取り上げたテーマの現象への迫りたい方法を明確にできる。そうすると自己の研究の及ぶ範囲や内包される現象の意味を捉えやすくなる。そのため、研究の前の訓練として紀要への投稿は意義が大きく、活用されていると思われる。

他方、紀要のもう一つの役割として、目次を眺めるとどのような研究者が所属しているのか、どのような学問が培われているのかを知ることができるという「発行組織の広報誌の役割」がある。また、学会誌と違って学問的公共性から離れられる点を活用し、その組織研究者の学問的な夢を掲載できる自由度の利点 (瀧川, 2002) もある。例えば、学問的には有用と考えるが学会誌や利益の面から出版社に応じてもらえない海外論文の翻訳や現在の社会的主流ではない課題に関する論稿、また組織として発信したい活動の掲載ができる。

本学部も学部教育のみから大学院教育が加わり教育研究活動に幅が広がっており、院生の文献研究論文の掲載は教育面から大きな役割を果たしているといえる。今後どのような紀要にしているのか、編集委員会でもさらに議論していただき、一層の発展を期待している。

注1. 理数系と人文系では考えが異なる。詳しくは下記の論文を参照していただきたい。

麻生武 (2009). “よい”論文というものは査読つき学会誌に掲載されるものなのだろうか? 心の諸問論叢, 4(1): 62-65.

〈文献〉

瀧川哲夫 (2002): 紀要とは何か. 北海道大学留学生センター紀要, 6:1.